

書 評

田中正之監修『イギリス美術叢書Ⅰ

ヴィジョンとファンタジー

——ジョン・マーティンから

バーン＝ジョーンズへ』

(ありな書房、2016)

田中正之監修『イギリス美術叢書Ⅱ

フィジカルとソーシャル

——ウィリアム・ホガースからエプスタインへ』

(ありな書房、2017)

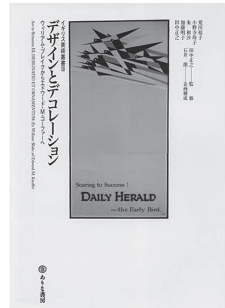
田中正之監修『イギリス美術叢書Ⅲ

デザインとデコレーション

——ウィリアム・ブレイクから

エドワード・M・コーファーへ』

(ありな書房、2018)



成田 芙美

この3冊は、18世紀から20世紀初頭のイギリスの視覚的芸術作品について、年代順ではなく、テーマごとに考察した論文集である。各巻5篇の論文のうち、ほとんどが19世紀の作品を扱っている。絵画が中心に論じられているが、彫刻、ブック・デザイン、建築装飾、家具やその他の室内装飾品、ポスターも取り上げられている。対象の範囲も広いが、それぞれの対象を捉える視野も広い。文学作品、見世物などの娯楽、服飾、社会的出来事や価値観との関わりが随所で指摘されている。これらの論文を通して、美術作品が人間の文化の歴史から切り離せないものであることがわかる。

このシリーズの目的は、第1巻の「あとがき」で明確に述べられている。まず背景に、知名度も評価も高いイタリアやフランスの美術に比べ、「イギリス美術は分が悪い」という認識がある。そこでこの一連の著作は、「日本でまだ充分に知られていない作品にも光を当て、なおかつ単なる紹介にとどまることなく、文化史的・美学的観点もふまえた論考を通して、その面白さを掘り起こしていく」(214)ことを目指したという。以下において各論文の概要を示し、最後に、この3冊が「掘り起こし」た「面白さ」について述べたい。

第1巻『ヴィジョンとファンタジー——ジョン・マーティンからバーン＝ジョーンズへ』の第1章「ジョン・マーティン《ベルシャツアル王の饗宴》——物質的崇高の表象」(荒川裕子)は、壮大なパースペクティブのもとに捉えられる劇的な画面で知られるマーティン(1789-1854)が描いた旧約聖書の一場面を扱い、当時論じられた「崇高」の美学、臨場感と風景についての情報をもたらす娯楽であるパノラマとの関連性を指摘している。タイトルの「物質的崇高」という言葉は、作家のチャールズ・ラムの皮肉だそう。

第2章「ヘンリー・フュスリとゴシック・スペクタクル」(マーティン・マイロン／小野寺玲子)は、フュスリ(1741-1825)の不穏な雰囲気感を漂わせる絵と、当時の流行のゴシック小説、光学技術を用いたファンタスマゴリアなどの見世物に結節点を見出し、「ゴシック・スペクタクル」として論じている。その「特有のはかない感じ」(54)には、近代という時代の「底なしの不確定性」(77)が表われているという。

第3章「リチャード・ダッドの見果てぬ夢——シェイクスピアのファンタジーを追って」(小野寺玲子)で取り上げられるのは、ダッド(1817-86)が妖精を描いた絵画である。イギリスを代表する劇作家の物語の世界を効果的に視覚化した手法を見直し、ダッドを「狂気の画家」ではなく「シェイクスピア画家」として再評価することが試みられている。

第4章「サミュエル・パーマーのパストラルにおける翳り——夢と影のヴィジョン」(山口恵里子)は、パーマー(1805-81)の幻影のような風景画の「翳り」に注目する。ここで言われる「翳り」とは、明るさと暗さの重なり合いである。それが「夢と影」の表現として生み出され、消えるまでの

経緯が、技法や画家の内面と合わせて解説されている。

第5章「礼拝像を離れて——バーン＝ジョーンズの《天地創造の日々》の構造」(喜多崎親)では、バーン＝ジョーンズ(1833-98)が聖書の主題のもとに、6点の絵画から成るひとつの作品を作り上げたことが考察されている。中世からの西洋絵画の伝統や、この画家の他の作品を参照しながら、この作品が複数性、反復性を強調した構造と視覚的効果を追求したものであることが論証されている。

第2巻『フィジカルとソーシャル——ウィリアム・ホガースからエプスタインへ』の第1章「呪縛の胸像——ホガース《当世風結婚》を支配する病」(デイヴィッド・H・ソルキン／小野寺玲子＋田中正之)は、ホガース(1697-1764)がこの代表作に描き込んだ胸像に着目し、この彫像が梅毒という性病、この病に破壊される身体と男女の関係、当時の人々の道徳的感情を象徴していることを示している。

第2章「フレデリック・レイトン《ダイダロスとイカロス》——ジェンダーの揺らぎを超えて」(荒川裕子)は、ヴィクトリア朝のアカデミーの重鎮であるレイトン(1830-96)が描いた男性の身体をめぐる議論である。ジェンダー、セクシャリティの「揺らぎ」が見られるヌードを通して、男性的か女性的か、あるいは同性愛か異性愛かという二項対立を超えて「芸術的な質」(74)にこだわった画家の姿が照らし出されている。

第3章「無垢とエロスの合わせ鏡——オーガスタス・レオポルド・エッグ《旅の道連れ》考」(小野寺玲子)は、エッグ(1816-63)が2人の女性を描いた絵画を分析している。列車の中で向かい合って座る彼女たちは一見よく似ているが、その微妙な差異には、当時の男性が女性に求める二面性、貞淑さと性的魅力が表現されている。その対照的な性質の同一性を強調した点において、この作品は独創的であるという。

第4章「肉をまとう魂——D・G・ロセッティが描いた〈手〉について」(山口恵里子)が扱うのは、ロセッティ(1828-82)の絵における女性の身体である。その女性像が制作年代順に検討され、画家が初期において魂を手として表現しようとし、その後、腕に官能性を追求し、最終的に、魂と肉体の拮抗を同時に手と腕に表わそうと試みた過程が示されている。

第5章「フランケンシュタインの怪物——ジェイコブ・エプスタインの

《ロック・ドリル》をめぐって」(田中正之)は、エプスタイン(1880-1959)の彫刻についての考察である。子を宿したロボットのような石膏像と削岩機を組み合わせた作品を、プリミティヴィズム、機械的な美、セクシャリティの観点から読み解き、さらに当時の評価を第1次世界大戦との関連において見ている。

第3巻『デザインとデコレーション——ウィリアム・ブレイクからエドワード・M・コーファーへ』の第1章「装飾の喜び——ウィリアム・ブレイクと中世彩飾写本」(小野寺玲子)は、ブレイク(1757-1827)のブック・デザインの技法と表現形式に、当時注目を浴び始めた中世の彩飾写本と共通する点を見出し、さらに彼がテキストとイメージのレイアウトによって詩と絵、また2次元と3次元の一体化に成功したことを示している。

第2章「メアリー・ウォッツによるデザイン・プロジェクト——フィランソロピーとアーツ・アンド・クラフツ運動のあわいで」(荒川裕子)は、美術史に埋もれた女性の創造行為に光を当てる試みである。象徴主義の画家として知られるG・F・ウォッツ(1817-1904)の妻メアリー・ウォッツ(1849-1938)が小さな村のチャペルに施した装飾を取り上げ、当時のケルト文化復興、カルチュラル・フィランソロピー(文化的博愛活動)の普及、アーツ・アンド・クラフツ運動との関連において、彼女のプロジェクトの意味を探っている。

第3章「装飾から造形へ——エドワード・ウィリアム・ゴドウィンの家具デザインとジャポニスム」(糸和沙)は、日本の芸術の何がどのようにゴドウィン(1833-86)に影響を与えたのかを明らかにしている。このデザイナーは当時の日本美術ブームの中で、日本の建築の造形原理に関心を寄せ、本質を理解し、家具のデザインに応用するに至った。日本の芸術の装飾性よりも構造を追求したことこそ、ゴドウィンの傑出した点だと言われている。

第4章「オメガ工房の装飾制作——「協同への期待」」(加藤明子)は、オメガ工房(1913年に開設)で作られた家具、ラグ、カーテンなどの形式上、制作上の特徴を分析し、このプロジェクトの独自性を浮き彫りにしている。その狙いは、制作者と使用者の感性的な交流、また、制作の経験がない人や外部の製造業者との共同作業によって表現の可能性を広げることにある。

た。この点ゆえに、オメガ工房は先行する装飾運動と区別されるべきだという。

第5章「エドワード・マックナイト・コーファアのポスター・デザイン——ヴォーティシズムとの関連をめぐって」(田中正之)では、コーファア(1890-1954)と1910年代のイギリスの前衛芸術運動であるヴォーティシズムの関わりが論じられ、両者の表現の共通点として、直線の多用と抽象化によって生まれるダイナミズム、そして都市生活における能動性への志向が指摘されている。

各論文を概観したところで、このシリーズの目的に立ち返り、これらの著作が「掘り起こした」面白さについて述べたい。第1巻が読者に伝えたかったのは、「合理性和非合理性が手を結んで、めくるめくファンタジーへと昇華する妙味」(214)だという。他の2巻が目指した「面白さ」については明言されていないが、シリーズを通して、同様の二項対立を超えようという狙いがあるように思われる。第2巻では、個人の身体と社会の文化が不可分であることが美術作品を通して示された。その複雑さに気づくとき、視野が開けるような楽しさがある。第3巻も概念の対立構造を前提にしている。この巻で扱われるのは、美術史の周辺で語られながらも「美術」とは言い難い「デザインとデコレーション」である。それを取って「美術叢書」に含めたことに、「美術」とそうでないものを分ける枠組みに挑む「面白さ」がある。

また別の「面白さ」もあった。今回のように3巻を続けて読むと、それぞれが掲げたテーマが絡み合っていることに気づく。例えば『ヴィジョンとファンタジー』の第5章によると、バーン＝ジョーンズの天使たちは「装飾的機能」(184)を与えられている。したがって、その表現は『デザインとデコレーション』の問題でもあると言える。また『フィジカルとソーシャル』の第4章では、ロセッティが女性の手として描いたのは魂であると説明されているが、魂には本来、形がない。この画家が試みたのは、目に見えないものを見る形にすることであり、それは『ヴィジョンとファンタジー』で論じられた画家たちに共通する課題ではないか。さらに言えば、第3巻第1章で登場したブレイクは、紙面を巧みに「デザイン」したデザイナーだが、幻影的風景画を扱った第1巻第4章で言及された通り、彼は「ヴィジョ

ン」の画家でもある。つまり、このシリーズが掲げた3つのテーマは、美術史上やその周辺で扱われてきた作品が共有する根本的問題なのだろう。タイトルとして語呂がよく、また視覚的な統一性もあり、人の注意を引きつける魅力がある点はもちろん、美術という営みの核心をついた点でも優れたテーマ設定である。

なお、第3巻に続く『イギリス美術叢書IV ランドスケープとモダニティ——トマス・ガーティンからウィンダム・ルイスへ』が2019年5月に刊行された。上記3巻の論文タイトルのどこにもターナーの名前が見当たらないことを怪訝に思われた方がいるかもしれないが、こちらで登場しているので、ご安心いただきたい。

——青森公立大学講師